

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行 (記録:安藤彰浩、編集:吉田千秋・中川健史) (主宰)吉田千秋 090-7917-9602

2020 <新年のはじめに>

「<9条のころ>を体現した中村哲さん」

中村哲医師が12月4日、活動現地アフガニスタンで銃撃され亡くなった。日本と世界の平和を考えると、ほんとうにかけがえのない人だった。わたしはすぐに「岐阜・九条の会」の人たちに呼びかけ、「戦争・貧困のない世界をめざして——中村医師を偲び、その志を学ぶつどい」を、22日に開催することになった。

短期間にも関わらず、70名ほどの人が参加され、ペシャワール会編集のDVDを観て中村さんの活動の姿をたどり、同会東海支部長の五井泰弘さんの話を聞き、あらためて中村哲さんのすばらしさを知ることができた。

多くの人が語っておられるように、中村さんは世界に誇る憲法9条を身をもって体現された方だった。その<9条のころ>とは、きく耳をもつこと ゆうじょうを深めあうこと うまが合わなくてもよく話し合うこと じぶんの国のことだけ考えないこと よその国に行つて武力を使わないこと うそをついて戦争をしないことである。

その核心は、「武力によっては平和はやってこない」ということである。テロが横行し、銃弾が飛び交う内戦状態の地で、自分のことはかえりみず、現地の人たちのいのちを守り、くらしていけるように、失敗を繰り返しながら、医療活動と緑の大地を広げてこられた。そして、志半ばで銃弾によって倒れたその悔しさはいかばかりであつたらうか。

日本の現状をみると、<9条のころ>とは真逆の政治が行われ、中村さんの志は完全に踏みにじられている。いまわたしたちは、自分なりのかたちでその志を受け継ぎ、戦争がなく、いのち・人権が守られる平和な社会をめざして力を合わせたいものです。

(主宰 吉田千秋)



第138回哲学カフェ例会(2019.12.12)

《日本の男女平等はどうして進まないのか?》

「このテーマはこれまでも取り上げてきたが、ここ最近の動きはあらたな平等意識の拡充を示すものとして注目される。これからも各人が、平等感覚を磨き、実践していければよいと思われた。」

問題提起・吉田千秋

*まずこの問題の現状について説明します。男女平等に関して全体としてかなりの進歩は見られるものの、新しい形の差別があつて、今、違ったかたちで展開していると言えます。女優の石川優実さんが発起人と

なって、ヒールの高い靴を履くように求めたりする一部の会社の女性社員に対する服装の規定を告発する“#KuToo”運動が今年注目を集めました。またこの他、女性に化粧を求めたり、眼鏡の着用を禁止す

る会社も批判の対象になっています。

*こうした例の様に、男性に対しては適応されない形で、女性をみかけで価値づける差別的な見方が社会生活の現場で克服されていない現実が明らかになっています。以前は今よりも多く男女差別があったはずですが、社会全体の問題意識が高くなかったためか、国民の間で広く議論されることはありませんでした。今こうした声が上がること自体は意識が高くなったことの表れでもあります。

*石川さんや、資料にある雨宮処凛さんが言っている様に、まず、当たり前と思わないで、はっきり差別と見えない差別を問題として意識化することが重要です。これまで女性自身が気付いていても、「女だから当たり前」という壁にぶつかって、簡単に発言できない現実がありました。“世界経済フォーラム”が毎年発表しているグローバル・ジェンダー・ギャップ指数で、日本は2018年、世界149カ国の中で110位と、先進国の間では際立って低い位置にあります。2017年の114位と比べ若干の前進はあるものの、低い水準に留まっています。

*北欧諸国がこのジェンダー・ギャップの指数の上位を占めていることに驚きはありませんが、5番目を中米のニカラグア、6番目を東アフリカのルアンダ、さらに8番目をフィリピン、10番目を南アフリカの大西洋側の北に位置するナミビアが占めていることに違和感を覚える人がいるかもしれません。この指数はあくまでも経済、教育、保健、政治の4分野での純粋な男女の格差を示すもので、発展レベルを評価するものではありません。いずれにせよ、日本は同様の発展レベルにあると見なされる先進国の中で、際立って男女の格差が大きいと言えます。

*教育分野全般で、日本の男女に格差はあまりありません。しかし、これが大学、大学院、専門性の高い研

究者の領域になると女性の数が少なくなって、大きな格差が生じています。大学の研究職への女性の進出は限定的で、女性教授は学内でまだ稀な存在です。女性が研究者として同等以上の高い能力を持っていても、なかなか教授のポストには着けません。男女平等への取り組みを示すために、学長に男性を選んで、副学長に女性を据えて体裁を整えていますが、一般的に女性が大きな障害にぶつかる現実は変わっていません。

*男性の心の中に潜む女性蔑視が克服されていません。朝日新聞がネット上を横行する「声を上げる女性に対するバッシング」の事例を紹介しています。レイプ被害の元TBS記者に対して「女性の側に隙があったのでは」とか、「ハニートラップだ」といった疑問を呈する書き込みが行われたり、売名行為だとか、驚く様な発言の投稿も見られます。多くの人たちが子どもの頃から心に刷り込まれてきた価値観が克服できていないという実態がうかがえます。

*男性が育児休暇を取ろうとしても、会社の中には「男は仕事をしてなんぼ」という無言の圧力があり、制度上認められた権利を行使することを尻込みする男性が少なくないようです。私たちに、「お茶の用意は当然女の役割」という意識がないのでしょうか。私たちが気がつかねばならないことは周りにたくさんあります。まず女性の立場で考えることが必要だと思われ

ます。
*加えて、共感する力が必要です。仕方がないと片付けしないで、不当な扱いを受ける弱い立場の者に寄り添って、現実を変えていかなければならないように思います。今日は、いろいろの体験も含め、男女平等について率直に意見交換できればと思います。

意見交流

*あまり本質的な問題ではないが、言語そのものに男性優位を表す性的差別が刻み込まれていることがあります。もう30年くらい前の話であるが、ドイツでは女性の側からドイツ語という言語の特性に根ざした男女の不平等に異議申し立てがあった。ドイツ語を始め、ヨーロッパの言語の多くに名詞に性別がある。職業を表す言葉はほとんどすべて男性名詞であるが、今では女性の大部分が職業に従事している。例えば、女

性が医者であったり、裁判官であることも珍しくない。したがって、その仕事に従事する人たちを男性形の言葉でだけ表わすことに不満を持つ女性が声を上げ始めた。この問題が議論されて以降、少し面倒であるが、公式の文書で、必ず男性形と女性形両方の名称を使うようになった。名詞に性別の無い日本語ではこういう問題は起こらない様に思われる。



*日本語でも差別的な表現はある。男性の結婚配偶者のことを「主人」「亭主」と表現する。多くの女性がこうした表現を使っている。使う人たちは余り意識していないかもしれないが、この言葉に個人的に強い抵抗を感じる。平気で使う女性のことが理解し難い。配偶者は「連れあい」であって、私は配偶者に従属しない。

*「奥さん」という言葉も、家の奥の方で家事・育児を支えている者の意味で、主役である男性、夫の下にある者で、問題がある。

*これまで男女平等の問題を特に意識して考えることはなかった。男女平等は日本国憲法で定められていて、皆、戦後の学校教育で理念として学んでいる。自分もそれなりに実践してきたつもりだった。家事も折半して行なってきたと自負していた。最近、そのことを妻に尋ねたら、妻は好意的に見ても精々三分の一だと言っていた。問題を克服するには女と男の間にある認識のギャップを解消する必要がある。

*フィリピンの男女の格差が目立って小さいという話があった。フィリピンの人たちは日本人とは異なる生活感覚を持っていて、現実の問題に対する関わり方が違う。余り話題にならなかったが、最近、ミンダナオで地震があって、辺境では建物の基礎がコンクリートで出来ていないため、地滑りなどで大きな被害が出た。多くが避難所で生活している。彼らの多くは復興したら元の場所に戻って生活を再建することを思い描いている訳ではない。むしろ避難生活を送る場所が彼らの新たな生活の場所となる。特定の生活にかかわらずに状況に応じて生きて行くことを考える。その点で女性の方が多様で柔軟な働き方ができる。男性よりも、女性の方が生活力があって、家庭を支える

場合も少なくない。女性だからと控えめであることはない。ボランティアでフィリピンへ行くことがあるが、女性と関わる機会の方が多い。外国へ出稼ぎにでかける女性も少なくない。悪徳の仲介業者にだまされて、売られて売春させられる事件も起きている。

* 男女差別は悪意から生まれるものではないだろう。しかし女性の能力が十分生かされないのは残念なことである。今の日本にそのような余裕はない。女性に力を発揮して貰わなければ、これからの世界でやっていけない。遅かれ早かれ一層の男女の平等化の方へ進まざるを得ない。

* 今から40年前、70年代、複数の女性社員が三菱化成の女性に対する早期退職制度を憲法違反であると訴える裁判が大きな話題となった。これは日本も批准して加わっている女性差別撤廃条約に違反していて、今日ではあり得ない制度である。70年代は男女平等の実現を進める機運が盛り上がっていた。その後女権運動は全体に勢いがなくなってしまった。それでも賃金格差などは大きく縮小していった。バブル以降、共働きが必要不可欠となって、再び、男女の格差問題が大きく取り上げられるようになった。

* 女性差別撤廃条約の締約国となって、差別をなくす取り組みとして1985年“男女雇用機会均等法”が制定された。当時は男性と同じ様に働く女性を揶揄する様に、“キャリアウーマン”という言葉も生まれた。わが家は元々妻の方が稼ぎが良く、妻が専業主婦になるという選択肢は考慮の外であった。こういう言い方は、「男性の領域に入って男性と競うのは、女らしいを欠いた女性」といった、心に刷り込まれた考えの表れであろう。

* 今の現役世代の男性は、少なくとも頭では、「男女

平等の実現が正しい社会のあり方」だと理解しているのではないか。では何故いまだに男女の差別が解消されないのか。日本は、元来が男は男だけ、女は女だけ集まって一緒に行動する傾向のある社会である。複数の大人の男女が性別に関係なく一緒に行動することは稀である。会社の様な外に向かって閉じた組織の中では、個人として表明されることのない、男性原理の様な男性中心の考えが無批判に表に出るのではないか。



* 個人の意識もまだ十分に確立していない。私の夫は「頭は男女平等を理解しているが、身体は理解していない」と平気で言う。男の心に深く差別意識が根差している。好きで一緒になったとしても、男と女はなかなかこうした問題について話し合いができない。

* 難しい問題である。政治評論家の竹田恒泰は、男女の役割の違いは生物学的な違いに基づいていると言う。何が正しいのかよく分からない。

* 違っているものをどうして平等に扱うのか。あってはならない差別もあるだろう。しかし、男と女の社会における役割は元来、適性に基づいて生まれたものではないか。

* 生物学者は、男女の生物学的な差異は俗に信じられている程大きなものではないと言う。それは職業的な差別待遇を正当化するようなものではない。

* いつの頃からか、ジェンダーという言葉が使われる様になった。女権運動と関係があるのであろう。クロネコヤマトで仕分けの仕事をしている。職場には男も女もいるが、女性が30キロを超える様な重い荷物を扱うことはできない。力仕事はどうしても男の仕事になる。

* 男女の分業は自然に生まれたもので適性に基づいている。但し同じ能力を持った物に同じ機会が与えられないとすれば問題である。能力に応じて仕事をすれば好い。すべてを同じにはできない。

* 女性は昔から化粧をしてきた。以前、ほとんどの男は化粧と無縁だったが、最近は化粧をする男もいる。男がしてはいけない理由はない。男女の扱いに差をつけるよりも、男女平等をより好い選択だと考える人が増えている。社会はいつも新たな選択をすることによって、変化して行くものである。

* ハイヒールは健康上問題のある履きものである。女性はもっと声を上げて求めることをはっきりさせた方が好い。もちろん男性の協力も欠かせない。

* 男と女の決定的な違いは、女は出産能力を持っているということだと思う。そこから女は、「家で生まれた子どもの面倒を見て、主に家事に従事する、男は外で働く、外の脅威から家族を守る」という形が成立する。男の特性は力の強さ、攻撃性で、女のそれは、粘り強さと優しさである。そうした男と女の適性もそうした自然な役割分担を反映したものである。そこまでは自然な流れの様に思える。

* 男にもバイオリズムがあるし、男の体は女の体ほど強くない。子どもを産む能力を持つ女の体は、実際には男の身体よりもはるかにタフで、色々な困難に耐えられるようになっている。

* かつて女性には就労制限があって、女性を守るという目的で深夜の女性の労働は認められていなかった。今はこうした制限が撤廃されていて、深夜だけでなく4時~5時の夜明け前の勤務もある。

* 女は家庭というのは本当か。女の活動の場が家だったというのは後から作られた神話に過ぎない。農民の女性は男と同じ様に外で畑仕事をしていた。給仕する者がいたのは貴族など一部の支配階級の家だけ。一般に食事は簡素なもので、家で料理を作るなどということはなかった。女が家事(料理、掃除、洗濯)をするというのは近代以降の話。

* 子どもを産めるのは女性だけで。出産前後の一定期間女性は外で仕事をするができない。何人か子どもを産めば、女性のキャリアはどうしても中断を余儀なくされる。以前に比べて、男性が育児休暇を取って女性を助けることができるという発展は見られるが、女性がキャリアのハンディーを持つことは明らかである。

意見交流の最後に・吉田千秋

- *今年、一部の私大の医学部で入学試験の際、女性受験者が合格点を取っているのに、意図的に不合格にされていた事実が明らかになって、女性に対して不当な差別待遇が組織的に行われている現実が大きな話題となりました。女性差別の状況は、この例に顕著な形で表わされています。隠蔽されてきましたが、性別のために資格を満たしていても正当に評価されない男女の差別の現実が存在しています。男女の差別的扱いは、表に出ないだけで、様々な所で行われています。
- *大学に在職中、医学部の推薦入学の選考委員を務めたことがあります。女性の候補者の方が全体として優秀でした。当然、男女の別なく成績で選ぶべきですが、他の多くの選考委員が男性を取りたいと主張して譲りませんでした。どうしてかというと、女性は研究室に残らないからということでした。実はこうした男性優遇が社会の至る所で当たり前の様に行われてきました。ただ昔と違って、不正行為に関わっている内部の人間が語る様になって、今回の女性を落とすことを意図した入試の採点における不正行為の様な、女性に対する差別待遇が明るみに出るようになりました。
- *不正を正すためには、まず疑問を感じた人がものを言える環境を作ることが必要です。通常、差別は日常の慣行として蓄積され、簡単になくなる様なものではありません。様々な少数派の差別を取り除く取り組みをしてきたアメリカでは、アフーマティブアクションといって、差別待遇を受けて来た黒人や先住民族、

女性など、弱者グループや少数派(マイノリティー)を、受験や就職や昇進において、始めから点数を加算するなど優遇措置をとって、社会進出の機会を与える試みが行われてきました。

- *これは、例えば、同程度の能力を持っている場合、黒人または女性を採用するとか、あるいは、募集の際、始めから一定数の枠を設けて、黒人または女性を採用する様な試みもあります。また幾つかの国では、選挙の際、必ず男女同数の候補者を立てることが義務付けられたりしています。これは、差別は簡単には克服できないことを理解した上で、数を揃えさせて、積極的に差別を克服しようという試みです。こうした試みは、社会の仕組みに入り込んだ不平等を克服するためには、強引と思える措置が必要なことを物語っています。

- *一体男女の差異とはいかなるものなのでしょう。能力は社会的に作られるもので、差別を正当化するものではありません。差異は男女の間にも、男同士の間にも、女同士の間にも個性の違いとして存在するものです。問題は差異が差別に転化してしまうことです。何故なのでしょう。白人と黒人や先住民との間に、肌の色とか、顔形の多少の違いに以外にどんな違いがあるのでしょうか。どの社会でも強い立場にある者はその社会の在り方から利益を得ています。彼らは自分たちの強い立場が強い立場であり続け、弱い立場の者が弱い立場の者であり続ける仕組みまたは構造を作って、彼らの利益を守るろうとします。強い立場の者は立場の弱い者に対してより大きな権利を享受する構造が固定した物になっていきます。弱者は強者と同じ利益を享受する立場から排除された人たちとなって、差別は特定の人に同じ利益を享受させないことです。

- *性的役割分業は社会の歴史的な発展の中で生まれたものです。それは初めの段階では、男は力仕事を受け持つといった程度の、ただの役割分担に過ぎないものだったでしょう。しかし、やがて私的所有の社会が誕生して、蓄積された所有である財が個人の権力の背景を成すものとなっていきます。共同体の階級社会化は富の分配と密接な関係にあります。身分を始め、人間社会の差別の歴史は、私的所有の発



生と共に始まったと考えられます。

*英語を始め多くの言語で、男を意味する言葉は同時に人間を意味する言葉でもあります。男性優位の世界観は、男女を問わず私たちの心に深く根ざしているものです。男性優位を克服して真の男女平等を実現するためには、社会の構造的な変化が必要かもしれません。いずれにせよ、社会は全体として男女平等の実現の方向に動いています。男女同権において大きな進歩があった事実の意義を軽視することはできません。

*たしかにまだ課題は沢山あります。個人の痛みを理解できるかが問題です。男性は女性の痛みを十分理

解していません。もちろん女性が男性の心を理解することも容易ではないでしょう。上の人間は下の人間のことを知りません。しかし、下の方からは上がある程度見えるものです。弱い立場の人間の方が他人の痛みを感じとる力を持っているものです。

・告発の声が聞こえるようになって、知らなかった現実が見えてくるようになりました。そういう意味でも、私たちの社会は全体として前進していると思います。もともと弱い立場の人の声が聞こえる様に、風通しをよくしなければなりません。これからも一層の努力をしていく必要があるように思われます。お互い力を合わせていきましょう。

参加者の感想

○自分の意見を言うとうなるんだろう、と不安に思いましたが、皆さんが聞いていただけてよかった。色々な意見が聴けて楽しかった。「差異がなぜ差別に転換するのか」、支配、権力のため…。考えさせられた。毎日をしっかり自分で考えることが大事ですね。ありがとうございました。(日登美)

○社会的・歴史的差別を学ぶことと、日常の中で自分の意見を持ち、これを発信すること。若い人が人が発信した時を応援する。そういうことは、自分のペースで、無理せずにやるのが大切だと思いました。(obobobo)

○知らず知らずのうちに、差別が刷り込まれていることを知りました。でも当初はそういう意識はなくて、いつのまにかそういう意図で動かされたように感じました。(りょうま)

○ジェンダーについてたいへん分かりやすかったです。女性差別が革新的な人々の中にもあるのでは、ということが分かりました。差別構造は依然として、今の日本社会に旧態然として存在している・憲法と労働基準法が守られていないから。(安永)

○吉田先生が言われた「差異が差別に転化する」という問題を、もう少し自分なりに考えてみたい。(唐辛子)



○広くしっかりした意見が聞けて、楽しく参加させていただきました。(スギハラ)

○哲学カフェに参加して毎回新しい問題に出くわす。日頃漠然としか考えていなかった事柄についてテーマ(課題)として提起されると自分を振り返って考える。「男女平等」を学校で教えられそれを普通の事と思っていて、成人に近づき「男は一家を支える者よ」ということも当然のこととっていた。育児、家事は「平等」に分担し、そのことで紛争は無かった。男女平等の推進者には、それでよしとするところが問題のようだ。私自身は推進活動はしていないが、推進者の不平等の様々な事態に対する主張には私の理解の範囲内で同調している。

アダム・スミス

○まず、男女間の「平等」を定義するのは非常に難しいと感じた。男女差が歴然としているのは、武力を伴う戦争、筋肉労働を伴う力仕事であろう。子供を産む機能の有無、仕事の種類によっても、男女の差はいろいろあると思う。しかし、どんな仕事でも男性より女性の方が優れた能力を発揮する場合も沢山ある。そのような場合に、女性を正當に評価できる社会的システムができていないことは問題である。今回は女性の側からの意見や考え方を知ることができて、勉強になった。(MS)

○色々な意見はその人の育った環境によるものだと思われる。私の家では親から女らしくとか女だからと言われることは一切無かった。付属小中では先生たちの指導よろしく、男女とも自分の言いたいことを遠慮なく言うのが当たり前だったが、高校でそれをやったら、生意気な奴とえらい反発を喰い、夏の帽子にインテリおてんばと落書きされたこともありましたね(笑)。よっぽどむかつく存在だったようで。親友の1人は大学を卒業した時、父親にこれから宴会に出ることもあるだろうが、決して酌などしてはならぬと言われたそうだ。このような者達が変わっていると誇られることがないようになれば、男女ともに生き易い社会になっているということではないだろうか。あと100年はダメか…。(YS)

○希望的観測ですが、男女差別は徐々に解消されていくと思います。様々な分野で、性別を問わず能力のある人間がリードしなければやっていけない時代が来ていると感じるからです。男女の性別に基づく能力差なんて、筋力を除けばあるわけがなく男性脳、女性脳問題にしても男女間の僅かな差より、男性にしても女性にしてもそのグループの中の個人差のほうが圧倒的に大きいという事実があります。よく考えてみれば当たり前のことで女性脳、男性脳に意味はなく、情報操作の一つでしょう。また10人に一人がLGBT、セクハラ被害者の20パーセントが男性と言う調査結果もあります。#Kutooもその通りで女性だけに義務づけられるのはおかしく、ハイヒールを履きたくない女性もいるし、履きたい女性あるいは男性もいるでしょう、その辺は自由にすればいいじゃないかと思いました。(たなか)



○医療の妊婦加算は、出産は無駄な医療費がかかるからやめなさいと言っているようなものです。この少子化問題に何をという感じです。社会、経済の支えになる内容を大切にしたい。ただ、男女雇用均等法の中の母性保護の撤廃は問題です。働き方を男性中心にしたこと、というより無茶な働き方を公認したこと。「24時間闘えますか」などと戦争じゃあるまいし。なお、最近の「#OΔtoo」などは、人権に関わる内容がより深まったことと考えます。中学時代の丸坊主改善は、女子にも頭髪問題として多くの示唆を得ました。

さらに、業者婦人などの税制上の問題も考えたいと思います。「所得税法第56条は、業者婦人など家族従業者の「働き分」を必要経費として認めず、申告の仕方でも不当に差別する。白色申告では、配偶者は年間86万円、その他の家族は50万円の控除しか認めておらず、社会的にも経済的にも自立できない状況を生む。」(全商連より)

(野口英男)



<世界一周貧乏旅 その6> 「モロッコ、サハラ砂漠にて」

みなさま、サハラ砂漠と言われると、どんなところを想像するでしょうか。

行ったことがない方は、たぶんぼんやりと、オレンジ色の細かな砂が海のようにどこまでも続いているような、そんなイメージかなと思います。ただ実際歩いてみれば、そこはラクダのフンだらけなのです。

空気はカラカラ、微生物もほとんどいないのか分解されず残り続けるため、砂漠ツアーで往来するラクダたちのフンがそこらじゅうに落ちています。砂丘のてっぺんからごろごろ転がる・・・なんて気分にはちょっとなれません。

それともう一つ、よく見かけたのが、『へ』が波打ったような形が点々と続く、謎の模様。変な模様だなー、風のせいなのかなー、なんて思っていると、現地ガイドのベルベル人が一言。「それ、ガラガラヘビが這った跡だよ。」えええええ！

ラクダのフンと、カラカラの植物の次くらいによく見かけるその『へ』の字。血の気が引きました。

さて、ガラガラヘビに噛まれることのなかったサハラ砂漠での早朝、陽が昇る頃に砂丘へ登ってみました。素足で登るサハラの砂は、さらさらとしていて柔らかく、乾いた雪を触っているような感触でした。

砂丘の頂上から周りを見渡すと、まさにどこまでも

砂の海が続き、風だけが作り出した丘と谷はゆるやかに波打ったり、つんと尖ったり、人間には作ることのできない自然100%のなめらかさがとても美しいと思いました。

そういえば、ガイドのベルベル人は地図も目印もなく、この広大な砂漠を歩き帰り案内してくれました。いったいどうやって・・・考えながらも、ガラガラヘビの出るサハラを素足で、後ろ手にのんびりとラクダを引き歩くその背中からは、過酷なサハラで生きてきたたくましい砂漠の民たちの歴史を、少しだけ感じたような気がしました。

(カモノハシタニ)



<三陸だより (6)>

～正月料理・・・ナメタガレイと煮しめ～

あけましておめでとうございます。去年は、台風15号、19号と自然災害が相次ぎ、全国各地に甚大な被害をもたらしました。このような厳しい状況下であっても、多くの地で救いがありました。それは、被災した地域で、たくさん子どもたちがボランティアに参加してくれたことです。きっと、被災された方々にとって、大きな希望の光となったはずです。いまま仮設住宅での生活を余儀なくされている方々がおられるうえ、三陸鉄道は不通区間も残っています。一日も早い復旧・復興を願います。

さて、今回は新年号ということで、三陸地方のお正月について書いてみましょう。まず、三陸地方の正月

に欠かせないものはナメタガレイです。一般にはババガレイと呼ばれるようですが、東北地方では、もっぱら



ナメタガレイの煮つけ(*朝日新聞ウェブページより)

「なめた」と呼ばれます。大ぶりのものを、家庭それぞれの味付けで煮つけにして食卓へ。それに新巻鮭とイクラも忘れずに。縁起物という意味合いもあるのでしょう。筆者は、幼いころから重箱に入ったおせち料理は

食べた記憶はなく、もっぱら食卓に並ぶ海の幸を食べた覚えがあります。

また、思い出す郷土料理といえば、「煮しめ」でしょうか。たくさんの具をじっくり煮込めば完成。三陸地方では大変親しまれており、なんと「ご当地ことわざ」があるくらいです。「煮しめからごんぼ(ごぼう)を抜いたよう」…何という意味か分かりますか？

じつはこれ、何か物足りない、目立たないが重要なものが抜けている、といった意味合いで使われるのです。ごぼうが入らない煮しめは、味に深みがないとかましまりが無いとか…筆者も食べて物足りない気がします。皆さんの地元ならではのことわざ、言い伝えは、何かありますか？

(M)



大木 毅著『独ソ戦—絶滅戦争の惨禍』
(岩波新書)



「地獄への道は『正義』で敷き詰められている」という言葉がかつて聞いた。過去の歴史でも身の回りでも、その通りだと思ったことがよくあり、納得したのを思い出す(「正義」は「善意」だったかもしれないが、同じようなものだ。もちろん「正義」も「善意」もこの場合は主観的なものだ)。

昨夏出た本書を読んで浮かんだのが冒頭の言葉だ。ここで描かれた独ソの戦場はまさに地獄だ。死者の数だけ見ても軍人・民間人合わせて、ソ連は1939年の総人口1億8000万人中2700万人、全体でだがドイツは同じく7000万人中700万人(日本は同じく7000万人中300万人)にのぼる。

本書によれば、ヒトラーは独ソ戦について、「対立する二つの世界観のあいだの闘争。反社会的犯罪者に等しいポリシェビズムを撲滅するという判決だ。…我々は敵を生かしておくことになる戦争などしない。」と、ドイツ軍の幹部に檄を飛ばした。ソ連も軍機関紙『赤い星』で、「ドイツ軍は人間ではない。ドイツ軍はあなたの家族を連れ去り、呪われたドイツで責めさいなむだろう。…ドイツ人の死体に勝る楽しみはないのだ」と、ソ連軍兵士を煽った(日本でも「鬼畜米英」だった)。

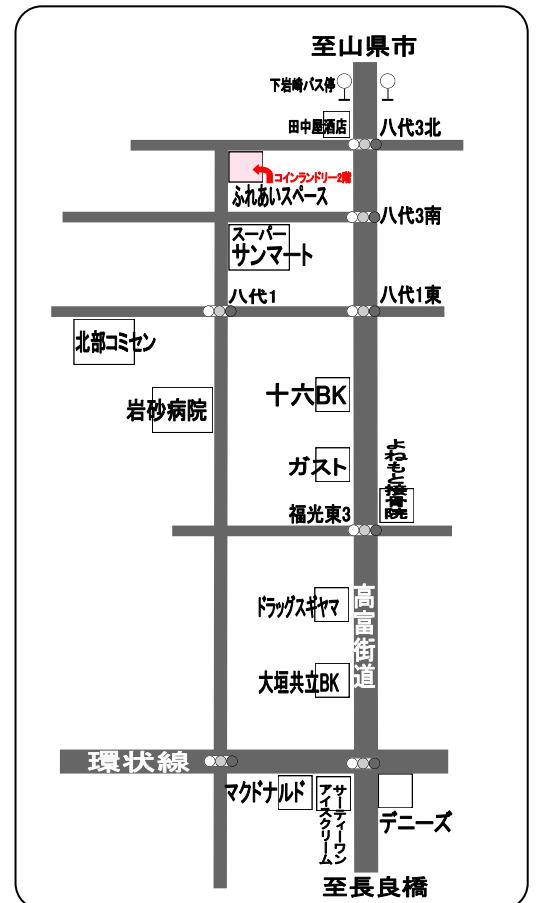
当然、独ソ両軍とも、第一次大戦後に締結された「戦時国際法」などは存在しないかのようで、捕虜の虐待・殺害、住民の虐殺や食料・物資・財産の強奪はあたり前、戦場は地獄となった。

私は本書の中身を云々する知識はないが、著者は過去の研究を検討し、できる限りの史料にあたって、冷静な筆致で独ソ戦の経過や本質をわかりやすく明らかにしてくれる。そして、独ソ戦に限らず戦争の持つ非人間性(地獄)を改めて考えさせてくれた。

(井川敏郎)

例会会場案内

例会への事前申し込みは不要です



2020年上半 **哲学カフェ、第24期の予定**場所 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」
例会は19:00～21:00です。

第139回例会 1月9日(木)	「激動の世界、新年の展望を語りあう」(＝新年会も) * 昨年に続いて、今年も激動する世界・日本、これにどう向き合うのか。 * 平穏無事に行きそうもない中、飲食物を持ちより、真剣かつ楽しく語り合う場に。 ⇒開始時間を6:30にします。酒類はなし。よろしく参集願います。
第140回例会 2月13日(木)	「100兆円を越える国家予算。収支とも大問題では？」 * 今年の国家予算は超大型予算。税収入を甘く見積もり、またもや赤字国債増。 * 支出でも大企業有利な政策目白押し。軍事費最高、国民生活はひっ迫。いいのか？
第141回例会 3月12日(木)	「近年相次ぐ「自然」災害、備えは大丈夫か？」 * 近年、地震のみならず、台風による河川決壊、浸水、死傷者続出、避難相次ぐ。 * これは「自然災害」ではなく、「人災」ではないか。これにどう対処するのか。
第142回例会 4月9日(木)	「大学入試はどうあってはならないのか？」 * 来年度実施予定の「大学入試改革」は、文科省の不手際、批判続出で破算に。 * 大学入試のあり方を、あらためて根本から考えなければならないのではないか。
第143回例会 5月14日(木)	「急増するフリーランス、外国人労働者。どうなるの？」 * 混迷続きの外国人労働者受け入れ問題にくわえて、新たに浮上した労働問題。 * 「労働者」ではなく、個人自由契約のフリーランサー。その問題点を探る。
第144回例会 6月11日(木)	「あらためて家族のいまと、その行く末は？」 * 「万引き家族」で示されたように、日本でも、家族・家族観はかなり多様化した。 * でも、いまだ「家族」主義に拘泥し、個々人の自立を阻むものになっていないか。
第145回例会 7月4日or12日	創立12周年記念行事 * 昨年は、「人口減少社会をどうとらえ、どう備えるのか？」で、シンポ開催。 * 今年はどうするか？ テーマ、講師など自由に、早めに意見を寄せて下さい

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしくお願ひします。口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !! <http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>わ
い
わ
い
が
や
が
や
アラカルト

- ★白川静博士の古代文字学によれば、漢字「男」は甲骨文で、「𠂔」と書き、金文では「𠂔」と書く。田畑で農耕器具の鋤を持って働く人、農地の管理者と井う意味である。力仕事なので、鋤は「力」の字形に変わり、「田」と「力」が合わさった漢字、「男」が生まれた。
- ★他方、漢字「女」はそれぞれ「𡚦」と「𡚧」と書く、象形文字である。なるほど、神に仕える女性（巫女）が、跪いている姿が読み取れる。これらの漢字の成り立ちから、中国古代社会の背景を垣間見ることができるのは、興味深い。
- ★ここで、女性が全て巫女のようなよなよとしたキャラクターだと考えるのは、早計である。「婦人」の「婦」や「主婦」の「婦」という漢字の成り立ちも面白い。
- ★これは、女偏と帚からできているので、帚をもって掃除をしている「主婦」と思いたいが、現代のイメージとは全く逆だからである。
- ★中国古代殷王朝では、女帝やそれに匹敵する身分の高い女性が、香り酒をしみ込ませた帚を使って、神殿や祖先の廟を清める儀式をとりしきっていた。それが「婦」。また、軍の指揮官となった妃もいた。決して一般家庭の「主婦」ではなかったのである。
- ★歴史的に男女の差別が出てくるのは、家父長制度の成立からであり、男中心の日本の社会を見れば、肯ける。男女平等の国づくりには、先ず男の意識変革が必須であろう。(島田幹夫)

